

「サッカーを通して、子どもたちの笑顔を見たい。そして、人と人とのつながり合いの大切さを知ってほしい」

Komatsubara Manabu

小松原 学さん

【元Jリーガー】

Profile こまつばら まなぶ / 1981年生まれ / 坪谷在住 / 98年4月11日(対C大阪)にJリーグ最年少出場記録を樹立し、最年少プロ契約(当時)を結ぶ。98年・2001年ベルマーレ平塚(現・湘南ベルマーレ)、2002年・2003年ヴァンフォーレ甲府、2003年FC湘南大磯、2004年・2005年群馬FCホリコシなどでプレー経験を積む / 群馬キッズリーダー技術部、キッズキャラバン巡回指導、ザスパ草津U-15 館林スクール監督などの指導層を持つ。現在、Jeoサッカークリニック主催。JリーグOB会会員。今年、群馬県社会人一部リーグ復帰 / 柔道整備師の資格を持つ
URL <http://www.jeo-fc.jp/>



モンゴルの子どもたちにサッカー支援をするため、元Jリーガーの小松原学さんがモンゴルへと旅立ったのが、東日本大震災直後の3月31日だった。震災直後のため一度は、計画を断念しかけたが、そんな時、被災した友人の一言がモンゴルの地へと向かわせる後押しとなった。帰国後、小松原さんは被災した子どもたちをサッカーで勇気づけるため、そして支援物資を届けるために、東北の地へと向かった。



「がんばろう日本」のステッカー。少しでも被災地の人たちと同じ気持ちになれるように一

「明るい話題を俺たちにくれ」被災した仲間の一言で自分はモンゴルへと旅立てた。

「自分がモンゴルの子どもたちにサッカーを教えに行こうとしたきっかけは知人の一言。モンゴルはサッカー後進国、だから環境も道具もそろっていないというのを聞いたからです。子どもたちにサッカーを教えたい、プロとして自分が

培ってきた技術や知識を現地の子どもたちに伝えたいと考え、行動をすぐに起こしました。仲間呼びかけ、サッカー用品(ボール・ユニホーム・スパイク)などもかき集め、サッカー支援物資としてモンゴルに寄贈することにしたんです。現地の子どもたちに、元プロサッカー選手として、本当の意味でのサッカーを教えたい、そして純粋にプレーを楽しむ子どもたちの笑顔を見たい、その思いで準備を進めていたと語る小松原さん。ところが、3月11日未曾有の大災害、東日本大震災が突如として起こった。「正直、計画を断念しようと考えました。日本がこんなときに、モンゴルだなんて…。きつと周りからも言われると思っただけです。でも、その時は被災地の

仲間のところに飛んで行きたい気持ちでいっぱいでした」と、震災直後の心境を語る。

その後、被災地の友人と連絡のとれた小松原さん。そこで友人から、思いがけない言葉をかけられる。

「被災地がこんな状況では、学に来てもらうって何もできない。せめて明るい話題だけでも俺たちにくれ。それが励みになると思う。だから、モンゴルの子どもたちに、サッカーを教えに行つて来い。」

この一言が、再びモンゴルの地へと向かわせる原動力になった。

「本当に申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、逆にそれが後押しになったと思います。現地の子どもたちにサッカースクールを開いて、成功したことを帰国後、必ず伝えに行くことも約束しました。」

友人との再会を約束した後、モンゴ



感謝状
モンゴルのサッカー普及に貢献したということと、地元企業から感謝状をいただくこと



モンゴル新聞
地元新聞社やテレビ局受け、サッカースクールが話題となった

ルの首都ウランバートルに降り立ったのは3月31日のことだった。

「ウランバートルは、想像以上に工場も車も多く、大草原の中の都市といったイメージではなかったですね。それと貧富の差も大きく、サッカーボールなどの道具も不足していて、とても子どもたちが、サッカーをプレーする環境にはないと思いました。現地では、車で何時間もかけて子どもたち

自分のできることは、限られている…。でも、被災した子どもたちの笑顔を取り戻したい。」

モンゴルから帰国後の5月8日、小松原さんは宮城県の被災地、石巻市と女川町へと向かった。被災した子どもたちにサッカーを教えに、そして友人との再会のために。もちろん、車には子どもたちへのサッカー支援物資を積んで。

「被災地を目の当たりにして、その被害の大きさに言葉が出ませんでした。ただただ嘸然とするばかり。海岸線を車で走つてみたのですが、多くの舟が津波で陸上に打ち上げられて、民家やビルにぶつかっていたり、車が折り重なるように山積みになっていたり、がれきの山もいたるところにありました。それと、へどろなどの匂いが、ものすごくかかったですね。

決してテレビだけでは、感じられない被害の大きさを、ここに来て強く感じることができました。」

その後、地元東北社会人サッカーチーム「コバルトレ女川」の友人の協力、サッカースクールを開催することに。「被災地でサッカースクールをしてよいのか迷いもあったし、本当に集まってくれないか不安も…。でも、当日は80人も子どもたちが集まってくれました。そこで、被災者のかたから来てくれて本当にありがとう、子どもたちのたくさん笑顔を見ることができたから、ありがとうね、といった言葉をかけていただきました。本当にうれしい、温かい言葉…。今、自分にできることは、子どもたちにサッカーを教えること。何より子どもたちの笑顔を取り戻したいです。」

それが、笑顔で話してくれた小松原さんの出した答えだった。



モンゴルの子どもたちに不足しているサッカーボールやスパイク、ユニホームなども寄贈



モンゴルの荒野は続く

術だけでなく、体のケアや、けがの手当など、メディカル部分の知識も教えてきました。現地の人たちの信頼関係も築けたと確信しています」と現地での手応えを教えてください。



女川町の漁港も地震による津波で、壊滅的な打撃を受けた。震災のすさまじさが改めてうかがえる



被災地の子どもたちの元気な声が響きわたる(石巻市)